

幼児をうけ入れるということ



玉井 収 介

「うけいれる」ということは Accept という英語の訳としてカウンセリングやプレイセラピーの領域でよくつかわれていることではです。「受容」とも訳されています。

では、それはどういう意味なのかということですが、もともとカウンセリングやプレイセラピーの場面と幼稚園での保育とはちがいますから、アクセプトということをごまかく説明しても直接には役立たないかもしれません。そこで、ここでは、幼児保育の場に役立ちそうなことだけを考えていくことにいたします。

まず、一つのごことは、子どもは一人ひとりみなちがっているということですが、あたりまえのことなのですが、かおかたちが

ちがっていることがよく知られているほどには、もの考え方や感じ方までがちがっていることは理解されていません。

その中には、子どもは一般にこういうものだという、おとなとちがった子どもらしい共通性というものもあります。一般に、三才の子どもは、こんなふうを感じ、このくらいのが理解でき、この程度のことができるというような標準です。ふう、児童心理学の本をひらくと、子どもの精神の発達を、知的な側面、運動能力の側面、社会性の側面、感情的な側面というようにわけて、それぞれ一才児ではこのくらい、二才児ではこのくらいという標準が出ています。

こういう場合の標準というのは、大体子どもの発達の平均的なレヘルが示されているわけです。

このような研究は基礎的な知識として非常に大切なことはいうまでもありませんが、そういう知識をすっかり頭に暗記する

までつめこんだとしてもそれで実際に目の前を走りまわっている一人の子どもの心が理解できるかというところはいえませんが

なぜかというところ、そういう平均的な発達をどの面でも示しているような、いいかえればどういう面からみても十人並というような子どもは実際には存在しないからです。もしいたとしたらおもしろ味のない子どもでしょう。どこからみても平凡だというより仕方がないのですから。

実際の子どもは、この発達の平均をつらねたカーブからは、どこかの面ですぐれていたり、どこかの面でおくれていることばかりでなく、すぐれている、おくれているで計りうることばかりひとりひとりちがっているのです。

ですから、みんなほかの子がそうだからという考え方は埋解できないこともできます。

たとえば、わたしたちのしているフレイ・セラピーの中でこんな例がありました。

子ども「きのう、お父さんとプロ野球みにいった。」

治療者「そう、よかったね、おもしろかったでしょう。」

この会話はふつうの場面ではごくありふれたものです。しか

し、フレイ・セラピーの場面ではいけないのです。なぜかといえば、この治療者は、他の大部分の子どもがナイターがすきだから、この子も好きにちがいないと勝手にきめているからです。

もしこの子がナイターが嫌いだったらどうしましょう。お父さんと外出するのが嫌いだったらどうしましょう。気の短かいお父さんがたまたま珍しくつれていってやると思ったので、お母さんが、お父さんの気のかわらないうちにと、「いいわね、いいわね。」とってお出ししたものでしたらどうでしょう。

この治療者のいい方では、子どもはこの人の前でも、やはりおもしろかったというふりをしていなければならなくなってしまう。

信じられないみたいな話ですが、自分の子どもから乱暴されて家にいられなくなったお母さんもあります。一カ月はかりの間、お母さんはいろいろな方に相談されました。誰もが、「そんなはずはない、口では何といてもお母さんがこいしくないはずはない、ぜひ早く帰りなさい。」とすすめました。お母さんもそれを期待してかえられました。しかし、その子は、何しにかえってきたという態度だったそうです。

もちろん珍しいことにはちがいませんが、事実こういう

こともあるのです。

もちろん、ブレイセラピ^①の場面などと、幼稚園の保育場面などとはちがいますから同じに考えることはできないでしょうが、ともかく、この子にできることだからあの子にもできるはずだとか、あの子がよろこぶのだからこの子もうれしいにちがいないとかいう速断をすると、子どもの気持をつかみそこなうことがあることは注意しているべきでしょう。

次に、これに関係あることですが、知っていることと、そのとおりにできることは別だということも大切だと思います。

「きいてみるとわからないわけではない、それが言ったとおりにできないのはどういうわけでしょう。」というような質問をよくうけます。少しはやまった人だと、だからこの子は素直でないとか、将来ともいうことをきかない子になるだろう、とかいう人も出てきます。しかし、このことは、少しおとなが自身自身のことをふりかえって考えてみるとすぐわかることです。おとなでも、いいとわかっていることは必ずする、よくないとわかったことは必ずしないというものでしょうか。そんなことはないはずです。

歌の文句ではないですが、わかってはいるけれどやめられない

いということがだれでもあるものなのです。

おとなにくらべて、いわゆる超自我^②というか、自分で、自分をコントロールする力が弱い子どものことですし、それにいいわるいといってもそれはおとなが子どもにいつてきかせているだけで、まだどのくらい子ども自身のものになっているのかもわからないのですから、わかっているからできるはずだときめつけてしまうことも子どもの心を見失うものになることがあるのです。

もちろん、こういったからといって、何にも注意しない方がいいということではありません。いってもいってもきかないことがあってもふしぎではないということなのです。

今までのべてきたことからわかるように、うけいれるということは、知識の問題ではなくて感情の問題だということがいえるでしょう。つまり、感情的に安心できる条件をつくってやるということなのです。

しかし、こういっても、決して無制限にすぎ勝手なことをさせて放っておく、ただみている、ということではありません。

幼稚園の生活は、それまでの家庭の生活とちがって、いわば、子どもなりにある課題をもった生活だといえましょう。課題というのは、集団の生活であるということからくるのですが、

自分のいやなことでも、ある時間はそれをしなければならぬとか、したいことでもしてはならないこともあるとか、してもいいことでも、ある時間はいけないことがあるとかいうことです。これは、もちろん家庭の生活でもあります。クレヨンでものをかくのがおもしろいといって、壁にかいてはいけない、同じような紙にみえてもお父さんの書斎の書類はいじってはいけない、などといういろいろな制約はあるものです。そういう制約を受ければもちろん子どもの心に不満を生じるわけですが、しかし、それに耐えて、自分の欲求を押えたり、ゆずったりすることを身につけていくことは円満な適応を上げていく上に必要なことなのです。そういう欲求不満があまりにつよいとしばしば子どものいろいろな問題行動のもとになります。ですから、そういう制約がつけすぎるのはたしかに考えものです。しかし、ある程度不満はむしろ必要なもので、それを解決するには、不満をおこらないように何でもみたくしてやるという方向へではなくて、その不満に耐えられる力をもつようという方向へ解決すべきものなのです。

さて、幼稚園の生活というのは、家庭とちがって、他人の中ですし、集団の規律というものを守っていかなければならぬわけですから、こういう制約は、格段にきびしくなります。そ

これは、必要なことなので、子どももそれを少しずつ身につけていかなければなりません

それは、子どもながらに多少の不安や緊張をとまわずにはいられないものでしょう。大切なことは、そういう不安や緊張をむりに過少にみようとしたりすることなく、強いて元気づけようとすることもなく、そこからのがれてもう一度家庭に逆もどりすることのないようにということだと思います。もっと具体的というと幼稚園にいくのをいやがってにげかえってしまふことがおきないようにということです。

わたくしたちが相談室で扱ってきた例からいうと、幼稚園であべれたりいうことをきかなくて先生を手こずらせたたりする子の方が、まだとりあつかいやすくて、引っ込んで家へにげかえってしまふ子の方がむつかしいように思います。

こういう子どもは、自分の力で、他人との関係を維持しているという自主性ともいうものが弱くて、すぐ、それがなくても保護されているだけで生活ができる家庭というワクの中へかえりたがるのだと説明してもいいでしょう。そして、そういう自主性というものこそ、もっとも外から与えたり、教えこんだりすることがむつかしいものだといえるのです。